

for your Collection

○モンテヴェルディ：マドリガーレ集第7巻 ラ・フォンテヴェルデ（アルテ・デラルコ）独唱、重唱、さらには舞踊劇まで。マドリガーレというひとつのジャンルの枠を超え、バロック世俗声楽曲の新しい世界を拓く名作を、日本を代表する古楽の名手たちが実に爽やかに聴かせる。（金）

美山良夫 ● Yoshio Miyama

推薦 コンサートと録音を組み合わせて進められてきたラ・フォンテヴェルデによるモンテヴェルディのマドリガーレ・プロジェクト。第7巻は、ひとつの曲集にまとめて出版されたとはいえず、1曲1曲があまりにも個性的であり、作曲者がさまざまな機会、目的で書いた作品の集成といった感すらある。「コンチエルト」と標記された曲集は、多彩な声とその組み合わせ、楽器の参加、編成の変化に満ちている。だが〈恋文〉の朗唱調の簡素な書法はここでは異色であるし、劈頭を飾るシンフォニアと〈私は堅琴の調子を合わせ〉は、舞台作品のプロローグであったかのようなものである。二重唱による表現の徹底的な探求や緊張感（たとえば〈断ち切られた希望〉）。

このような出自や挑戦の多様と個性性を意識しつつも、ラ・フォンテヴェルデは、あくまで今日の演奏芸術の視点からのアプローチを崩さない。評者は繰り返しこの点を指摘してきた。二重唱では、さらに彫りのふかい表現もとめられたかもしれないが、第7巻もラ・フォンテヴェルデのこれまでのモンテヴェルディ演奏を確実に継承したものである。

小さな舞台音楽、ないしその一部とも見なせる作品でも、演劇的なコントラストや表情の過剰に傾くことがない。声楽、そして今回多く加わることになった器楽の、精緻でみずみずしいアンサンブルの美しさも特筆しなくてはならない。ひとつの審美感にうらうちされたシリーズが、完成に近づいたことを喜びたい。

峰尾昌男 ● Masao Mineo

録音評 録音は2013年から2018年まで、マドリガーレのシリーズとして続けている録音から選ばれている。従って器楽の編成は極めて多様であるが、会場はすべて同じであるため音の統一感はやよくとれている。響きのよい中規模ホールを活かした音作りは、各楽器の明瞭さと空間への広がりがよいバランスで、帯域的にも癖がなくかつ十分に広い雰囲気保たれる。（92）



■モンテヴェルディ：マドリガーレ集第7巻

〔全31曲〕
ラ・フォンテヴェルデ
〔アルテ・デラルコ◎ADJ063(2枚組)〕
オープン価格

矢澤幸樹 ● Takaki Yazawa

推薦 今月はタリス・スコラーズによるジョスカン・デ・プレのミサ曲全集の完結に立ち会ったが、もうひとつ重要な全集が完結に向けて着々と進んでいる。ラ・フォンテヴェルデによるモンテヴェルディのマドリガーレ全集だ。第7巻という巨大な秀峰が、今まさに登攀された。1619年出版の当巻は、マドリガーレの音楽内容が完全に変質したことを告げる。第4巻以前と当巻では、シエーンベルクの弦楽四重奏曲第1番と第3番くらい隔たりが大きい。ルネサンス・ポリフォニーの枠内にぎりぎり収まっていたこのジャンルは、通奏低音を導入し、第二の技法を採用し、ついにモノディから5声に至る多様な編成と

器楽の参入を招くバロック声楽曲へと変貌した。

コンチエルト様式主体となり、個々の歌手のキャラクターが前面に出るこの曲集になると、たとえばラ・ヴェネクシアーナのようなイタリヤ系グループの豊麗的な表現に比べ、ラ・フォンテヴェルデはややストイックな印象を与える。だが器楽も含めての精細なアンサンブルの精度の高さの中でこれらの作品を聴くと、発見がある。同時代の器楽ソナタ（カステッロ、マリーニ、ブオナメンテ等々）との驚くべき「近さ」だ。声により（ティルシとクローリ）における両者の妙なる統合を堪能しつつ、心は早くも〈タンクレデイとクロリンタの戦い〉を含む第8巻に飛んでいる。